

精神科における思春期電話相談の現状

医療法人社団 五稜会病院
 ○高橋典子、清水優子、石川祐子、中島公博

はじめに 当院の概要①

- ▶ 当院は中学生以上を対象とした精神科病院である。ストレスケア・思春期病棟があり、比較的若い年齢層の患者が多いことが特徴である。
- ▶ 平成27年10月より開始した、「さっぽろ子どものこころのコンシェルジュ事業」の事業所である。
- ▶ 内容の多くは新患の受診相談である。その受診相談電話はソーシャルワーカーが担っている。
- ▶ 受診・入院相談では、当院治療の適応を含め、医師や病棟へ正確な情報伝達のため情報収集を心掛けて対応している。

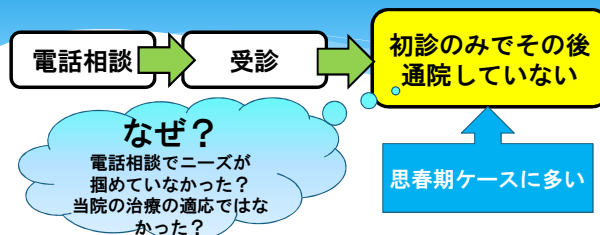


当院の概要②

さっぽろ子どものこころのコンシェルジュ事業

- * こころの悩みを抱える子どもや発達障害のある子どもが、より早く、適切な医療機関や関係支援機関での支援を受けることができるよう、適切な医療機関等を案内(コンシェルジュ)する事業。
- * 現在、市内5機関が事業所となっており、当院はその中の1つである。

目的



* 検討したこと *

初診のみでその後通院していないケースの理由を明らかにし、今後の電話相談業務やソーシャルワーカーとしての支援に必要なこととは何かを検討した。

研究方法

研究デザイン：後方視的調査研究

【データ】

当院の「電話相談記録」から、15歳以下の電話相談内容について調査した。

【期間】

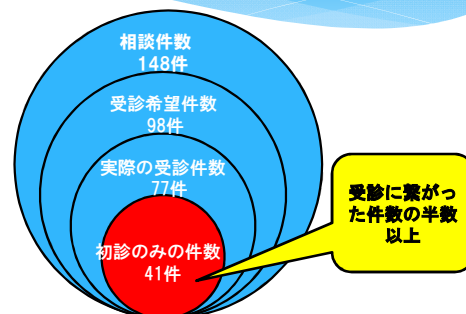
平成27年10月から平成28年3月までの半年間を調査期間とした。

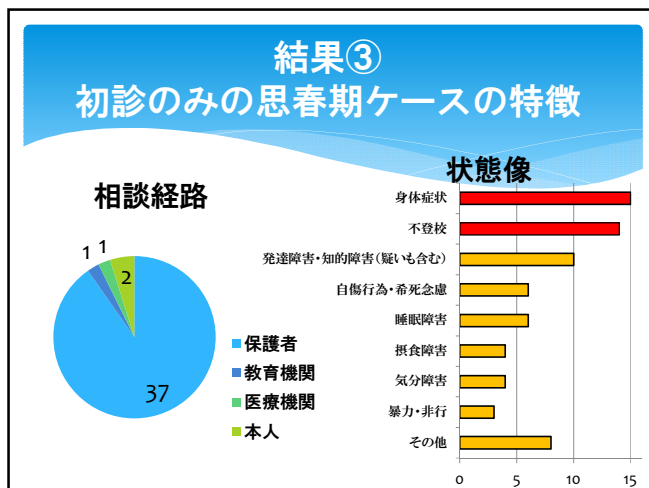
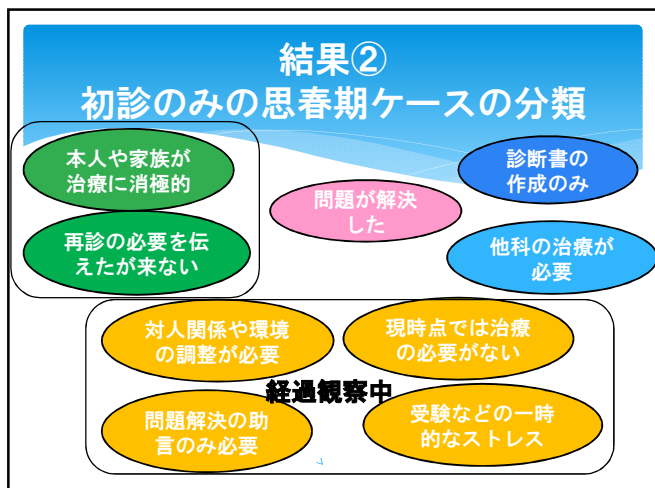
【倫理的配慮】

当院倫理委員会の承認を得たうえで行う。

- ▶ 個人の特定ができないようにデータは全て統計的な処理を行い数値化する。
- ▶ 電話相談記録は情報の漏えいがないよう厳重に保管し、他者の手の届かないようにする。
- ▶ データはパスワードのかかるパソコンで管理し、研究者以外は利用できないようにする。

結果① 研究対象の概要





考察

- ① 保護者や関係機関からの電話相談が多く、本人の意思は電話相談時には反映されにくい可能性がある。
- ② 受験やテスト、対人トラブルなど一時的なストレスから発生する症状と考えられるものが多かった。
- ③ 不登校を主訴とするケースが多く、問題解決のための助言や環境調整で改善が見込めるケースが多かった。

「電話相談でニーズを掴めていなかった」のではなく、思春期特有の要因で継続通院に至っていないことが示唆された。

まとめ

思春期のケースは、助言や環境調整を行うことで改善が見込めるケースが多く、必ずしも継続的な通院を必要としない。医療機関を受診することで、問題の整理や解決のための道筋を立てることができる。

↓

《ソーシャルワーカーとして何ができるか》

- ◆ 問題解決の糸口を掴めるように社会資源の活用を促す。
- ◆ 本人を取り巻く環境や機関と連携する。
- ◆ 家族の対応を助言する。

⇒電話相談時のみならず受診後のフォローもソーシャルワーカーとして担える。